**大橋 紗奈**
**大栄環境株式会社**
**技術部 研究開発課**
**グループリーダー**

2019年4月入社。プラスチックリサイクルに関する研究開発を担当。国の研究プロジェクトにも参画。資源循環の高度化と事業化の両立を目指し、技術の実用化に挑戦している。

**星野 孝充**
**大栄環境株式会社**
**西宮事業所**
**業務1課焼却グループ**
**グループリーダー**

2011年4月入社。焼却施設の運営に従事し、現在は三木バイオマスファクトリーで応援業務に携わる。将来の新炉立ち上げに向け、人財育成や運転体制の高度化に取り組む。

**山﨑 大輝**
**三重中央開発株式会社**
**三重事業所 開発課長**

2015年4月入社。廃棄物処理施設の許認可取得や開発業務を担当。現場と制度をつなぐ役割を担う。グループ初となるメタン発酵施設の立ち上げも経験。

**藤原 由貴**
**大栄環境株式会社**
**関西営業部 営業企画課**
**グループリーダー**

2012年4月入社。一般廃棄物処理基本計画や災害廃棄物処理計画の策定を担当。自治体との関係構築に貢献し、グループの成長戦略の一つである公民連携や新たな事業機会の創出を見据えて活動している。

**ファシリテーター**
**山田 真揮**
**大栄環境株式会社**
**経営管理本部**
**人事部長**

次代を担うリーダー座談会

# リーダーたちが語る 挑戦と成長、そして未来

焼却、開発、営業企画、研究開発と異なる分野で活躍し、現場やグループを支えるリーダーたち。
それぞれの挑戦、そして思い描く大栄環境グループの未来について語り合いました。

## それぞれの挑戦の先にある、業務のやりがい

山田　まずは、皆さんが感じる業務の面白さ、やりがいについて教えてください。

山﨑　施設の許認可取得を通じて、現場スタッフが運用しやすい施設づくりに貢献できることにやりがいを感じます。三重リサイクルセンターは規模が大きく多くの施設があり、その一つひとつに許認可が必要です。許可証を得るために細かな調整を重ねるからこそ、取得できた時は大きな手応えがあります。中でも印象深いのが、グループ初となるメタン発酵施設の立ち上げです。行政やプラントメーカー、技術部門とも密に連携して許可証を取得し、ようやく施設が形になった時の達成感は忘れられません。

星野　西宮リサイクルセンターでも近々、新たな焼却施設が稼働します。既設炉にはない発電設備を備えた新炉ですので、操業に備え、運転員と一緒に三木バイオマスファクトリーの応援業務を通じて、運営ノウハウを吸収しています。炉を安定稼働させ稼働日数を伸ばすという目標に向けて現場のメンバーと団結し、達成できた時に大きな喜びを感じます。

藤原　営業企画課では、全国の自治体に向けて一般廃棄物処理基本計画などの策定支援をしています。自治体によって人員体制も抱える課題もさまざまで、実情に応じた計画を提案することが難しさであり、面白さでもあります。さらに、提案を機に築いた関係性が、将来の公民連携事業への足がかりになる可能性があることにもやりがいを感じています。

大橋　私は入社2年目からの5年間、プラスチックリサイクル率の向上を目指すNEDO※の研究プロジェクトに参画しました。担当したのは、約400トンもの廃プラスチックをひたすら手選別してデータ化するという地道な作業です。しかし、この時に体系化した選別やデータ整理の手法が今、廃プラスチックを自動車部品に再生する「XtoCarプロジェクト」など、グループが進めている資源循環の実証試験に活かされています。5年間の積み重ねがグループのノウハウとして蓄積されたと思うと感慨深いものがあります。

※ NEDO：国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構

## 成長を加速させる部内外の連携

山田　異なる領域で活躍されている皆さんですが、部門内外での連携や学び、成長を支える環境について教えてください。

山﨑　開発課では、施設に足を運びスタッフの声を聞くことを大切にしています。関係性を構築する中で、さまざまな方から相談してもらえるケースも増えました。ヒアリングした内容をもとに届出等を行うことで、現場が運営しやすい施設づくりにつなげています。星野さんは現場での情報共有や教育をどう進めていますか。

星野　先ほどお話ししたように、私は今、発電設備の運営ノウハウを1年間かけてインプットしている最中です。得た知見を職場に持ち帰り、現場のメンバーへの教育や新炉の運営に活かすことが私の役割であり、新たな学びにもなっています。同時に、これまで培ったノウハウを三木バイオマスファクトリーのメンバーに伝えることもまた、役割であり学びですね。経験を双方向で共有し、組織全体のレベルアップにつなげていきたいと思っています。

藤原　知見の共有は、営業企画課でも重視しています。提案前には案件ごとに自治体のさまざまな資料を読み込み、実情を把握する必要がありますが、今は得た知見が個人にとどまり、業務が属人化しやすいことが課題です。課内の案件に誰もが対応できるように、試行錯誤しながら情報共有の仕組みづくりを進めています。

大橋　研究開発課も同じです。個々が担当する案件の中には相互に関連するデータもあるはずなので、課全体で情報を共有していきたいと思っています。さらに今後、グループ内の研究会社とも連携できれば、データをより効率的に活用でき、資源循環にも新たな可能性が拓けていくはずです。

山田　開発、現場、営業、研究を担う各課の知見が、当社グループ全体の力になっていることがよくわかりました。

## 個の挑戦から広がるグループの未来

山田　これから挑戦したいことや、思い描く未来について教えてください。

星野　2029年4月から稼働予定の「相生地域エネルギーセンター」には、自動運転のごみクレーンを導入する予定です。夜間勤務などの労働負荷を軽減できる上、人手不足問題の緩和にも寄与すると期待しています。最終的には焼却施設全体の自動運転化を目指します。

藤原　営業企画課は、営業部の自治体担当者の「こんな提案がしたい」という想いから発足し、これまで自治体向けの提案実績を積み重ねてきました。私を含め課内には民間企業への営業経験者もいますので、各々の知見を活かして将来的には対象を広げ、コンサルティングを含む幅広い視点からお客さまの課題解決に貢献していきたいと考えています。

大橋　私も、研究開発の側面から業界の課題解決を目指したいです。思い描いているのは、当社グループの総合研究所のような拠点をつくることです。グループ内に点在するデータや技術を集約して総合的に活用し、研究と実験で成果を上げ、これまでにない価値を生み出すことが目標です。

山﨑　私たちが挑戦し、新たな価値を創出することで、廃棄物業界へのマイナスイメージを払拭し、誰もが誇りを持って働ける環境をつくっていきたいですね。最近、グループ会社が協力した「ONDO - FROM WASTE TO WONDER - 」の展示会を見に行きました。再生プラスチックを素材とした、地域のアーティストの作品が並び、これまで単なる再生材料として扱われてきた廃プラスチックの新たな可能性を感じる内容でした。「ごみ」が過去の言葉になるような未来を目指し、私も日々の業務に向き合っていきたいと思います。

山田　皆さんの活躍が、当社グループの未来をさらに力強いものにしていくと期待しています。